家屋の歴史を守る

築150年の古民家再生

百済寺町の苗村さん

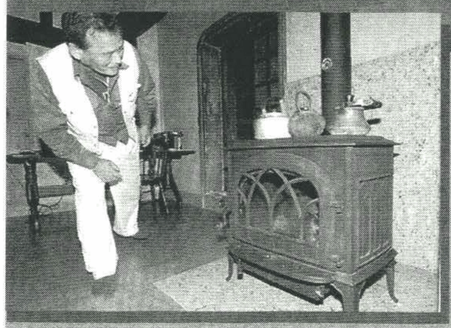
住居の改修に当たって、周囲の自然との調和や人が住み続けてきたことで家屋全体にしみ込んだ家族の思い出や歴史を大切に残した古民家が東近江市百済寺町にある。

その家屋は、築150年経った苗村忠行さん（62）の自宅。苗村さん宅は、鈴鹿山麓の高台にあり、加齢とともに冷え込む冬期の家事場の辛さに悩んでいた奥さんの願いに応え、土間になっていた台所とその周辺の屋内をリフォームすることにした。大工家系の六代目を継ぐ苗村さんは、それまで天井裏に隠れていた曲がった自然木の梁（はり）や柱を露出させることで屋内を広くし、それらを美しく磨き上げて和風の空間を創りあげた。

自営の住宅設備の腕を活かして床暖房や対面流し台などの近代的な設備を備える一方で、代々受け継がれて来た日本建築の知恵と落ち着いた民家の雰囲気を残した。

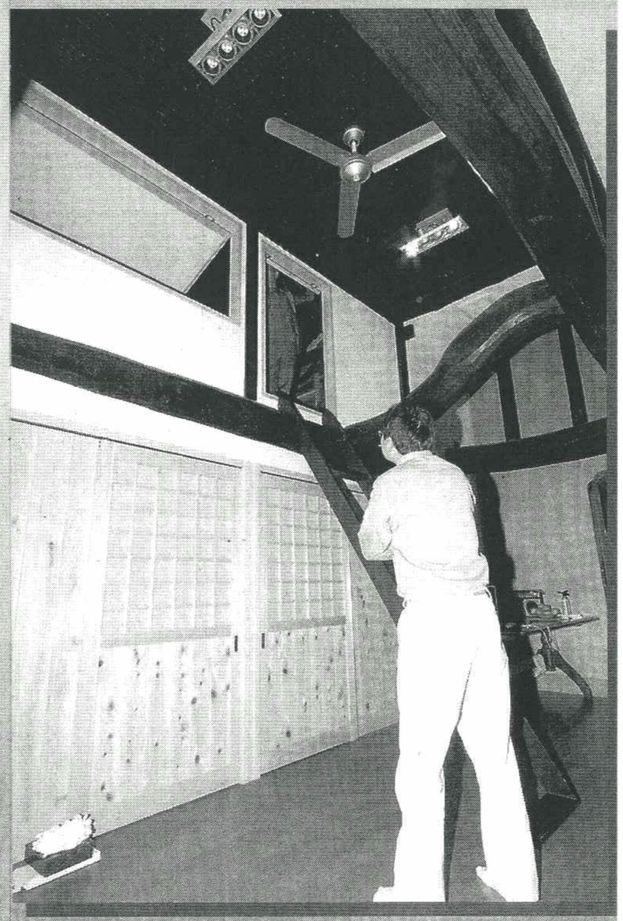
「昔の大工さんが建てた民家への思いを大切にしたかった」と苗村さん。今年11月に工事が完成するまで8ヶ月の月日を要した。改修に当たっては知り合いで、NPO法人・楽しい家づくり研究会の建築設計事務所に相談し、古民家再生のアドバイスを受けた。

今回、土間と台所をリビングに改修した屋内。曲がった自然木の梁が、古民家の雰囲気を醸し出している。



山麓のため、夏場のエアコンは必要ないが、冬場の暖房は欠かせない。裏山の材の恵みで暖まる薪ストーブを置いた。

トタンでカバーした茅と瓦葺きの苗村さん宅の住宅。



夏場は「つし」と呼ばれる屋根裏へ暖気を逃がし、外窓から冷気を取り入れる工夫をした中2階の通気窓。